

川染雅嗣さんのリサイタルを聴いて

島崎 昭



美唄市での川染雅嗣さんのリサイタル（後援事業）に安藤先生とご一緒した帰路、非会員の私に演奏会について寄稿をと依頼された。生来筆不精で、演奏の評論ができるほどの専門性もないが、充実して素晴らしいリサイタルで、会員の皆様にもこの雰囲気をもっと共有していただきたく敢えて筆を執った。

爽やかな風がやさしく肌に触れる秋晴れの一日、緑いっばいの中に造形美が広がる安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄で去る9月10日、副題に「彫刻を聴く～石の声に耳を傾ける」とある川染雅嗣さんの2年ぶり3回目のリサイタルに約100名の聴衆が集い、心地よい調べに聴き入った。

会場は、旧美唄市立栄小学校の小さな体育館だったアルテピアッツァアートスペース。当日は時間があって演奏をリハーサルから聴くことができた。天井が高い造りのこの会場は音響への配慮がないこともあり、リハーサルでは音がかなり響いて、というより響きすぎて懸念されたが、本番では聴衆が入って余計な音が吸収され「子供の情景」の一曲目「見知らぬ国」の一音目から素晴らしい音色に変化していたのには驚かされた。

当日のプログラムは、前半がシューマンの「子供の情景」Op.15、ブラームスの「2つのラプソディー」Op.79、シューベルトの「幻想曲」へ短調 D.940の3曲、休憩を挟んで後半はオールショパンで「ノクターン」ロ長調 Op.62-1、「4つのマズルカ」Op.24、それに「幻想ポロネーズ」変イ長調 Op.61の3曲という組み合わせであった。

余談になるが、こうしたリサイタルを開く際、演奏者はどのような意図をもって選曲し曲目構成を決めるのか、一度尋ねてみたいと常日頃思っている。ちなみにこの日のプログラムでは1828～79年の50年間に作曲された曲が演奏された。

懐の深い、安らぎと安心を与える演奏

川染さんの丹精込めた演奏は今回も安定しており、安心して聴くことができた。派手ではないがホッとすると時を与えてくれる。それは、ピアノの確かなテクニックはもちろんのこと、美術や文学などにも造詣が深いことが音楽性を豊かにし、社会の動きにも敏感で積極的に行動を起こし、かつ年齢を重ね様々な人生経験を経て人間的にも内面的にも成熟したというしっかりした基盤の上に醸し出される演奏が、懐の深さとともに安らぎと安心を与えてくれるのだと感じている。

「子供の情景」は13曲で構成されているが、最

後の「詩人は語る」の標題のように大人が自分の子供の頃に抱いた思いや体験を子か孫にやさしく語りかけるような気持ちで演奏されるというイメージを私は持っているが、今回の演奏はそれをベテランらしく見事に再現してくれたと思う。

有名なブラームスの2曲のラプソディーは骨格のしっかりした力強く情熱的な演奏でまとめてくれた。

連弾曲のシューベルトの幻想曲では、毎回共演されている美唄市出身のピアニスト柝原享子さんが高音パートを受け持った。十数分に及ぶ曲で歌曲王シューベルトが亡くなる年に書かれた哀愁を帯びたメロディーを、情感こめて表現された柝原さんの演奏を川染さんが支えるように暖かく包み込んでいたのが印象的であった。=左上写真(提供 柝原)=

後半のショパンの作品「ノクターン」Op.62-1は地味であり演奏会で聴く機会はないが、昨年のショパンコンクールの一次予選では出場87名中15名、二次予選では1名が演奏したのですっかりお馴染みになった。この落ち着いた優しく味わい深い曲をしっとりとした響きで聴かせてくれ、二曲目の「マズルカ」Op.24では舞曲らしく軽やかなタッチで表現された。ショパン晩年の「幻想ポロネーズ」Op.61は彼の曲の集大成の一つだが、この日はじっくりと熟成された安定感のある音楽を聴かせてくれた。

アンコールには、ショパンの「エチュード」Op.10-3（「別れの曲」）と、柝原さんとの連弾でアルベニスの「パヴァーヌ=カプリース」の2曲が演奏された。

今回も演奏者の解説付きのリサイタル。いつもながらに川染さんは、演奏される曲の背景やエピソードを時には笑いを誘いながらわかりやすく解説し、多くの人に音楽の楽しさ、親しみやすさ、そして奥深さを提供してくれた。

私は、ピアノなどの室内楽の演奏は大きな会場よりも演奏者の息遣いの伝わる間近で聴くのが本来の姿と思っているが、この会場はまさにその意に沿うものであった。ここ美唄でのリサイタルは会場周辺の環境も相まっていつも幸福感に満たされる。今後もこのような心の安らぎを与えてくれる演奏を期待するとともに、川染さんの益々活躍を祈念してやまない。（しまぎきあきら、2022/11）